津田文庫
文庫 1
1827
3

010190617454

二編諸家目録

上之巻

嶋津 四　大友 五　大江 六　宇都宮 七　八田 八　中條 十
山内 十　鎌田 十五　尾藤 十六　加藤 十七　後藤 十八　遠藤 十九
武藤 二十　田村 二十　原 廿一　岡部 廿二　吉河 廿三　二階堂 廿三
波多野 廿三　桜田 廿四　波多野 廿四　河村 廿五　富樫 廿五　林 廿六
伊賀 二十　安達 廿一

下之巻

熊谷 一　新開 三　二宮 三　本庄 四　富田 五　安保 五
飯田 六　香川 六　工藤 八　狩野 九　河野 十　野木 十一
相良 十三　高橋 十四　原田 十五　小鹿嶋 十六　宇佐美 十七　横山 廿
菊池 廿二　海野 廿三　緒形 廿五　天野 廿八　成田 廿九　朝来 卅

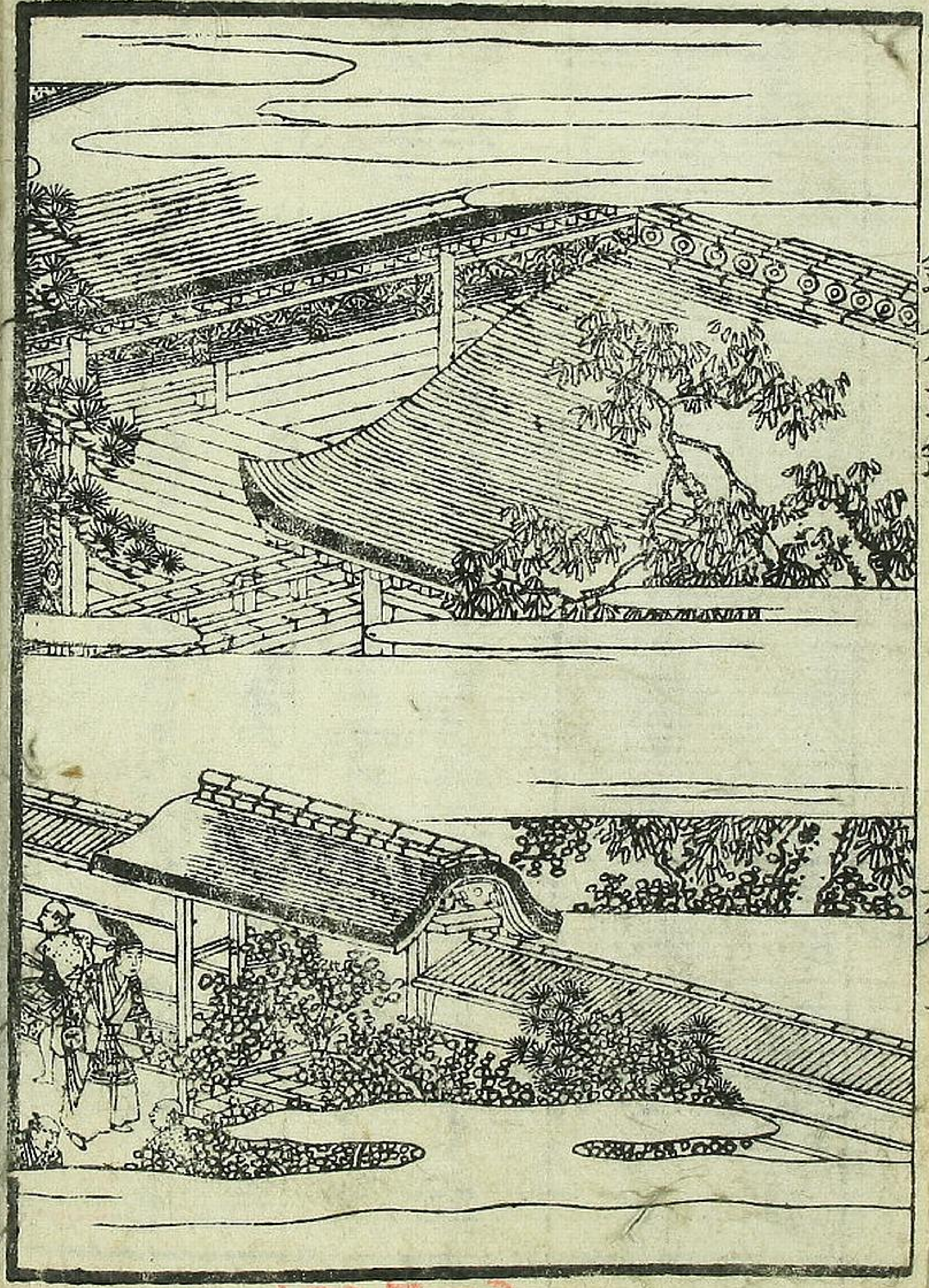
早稲田大学図書館蔵書

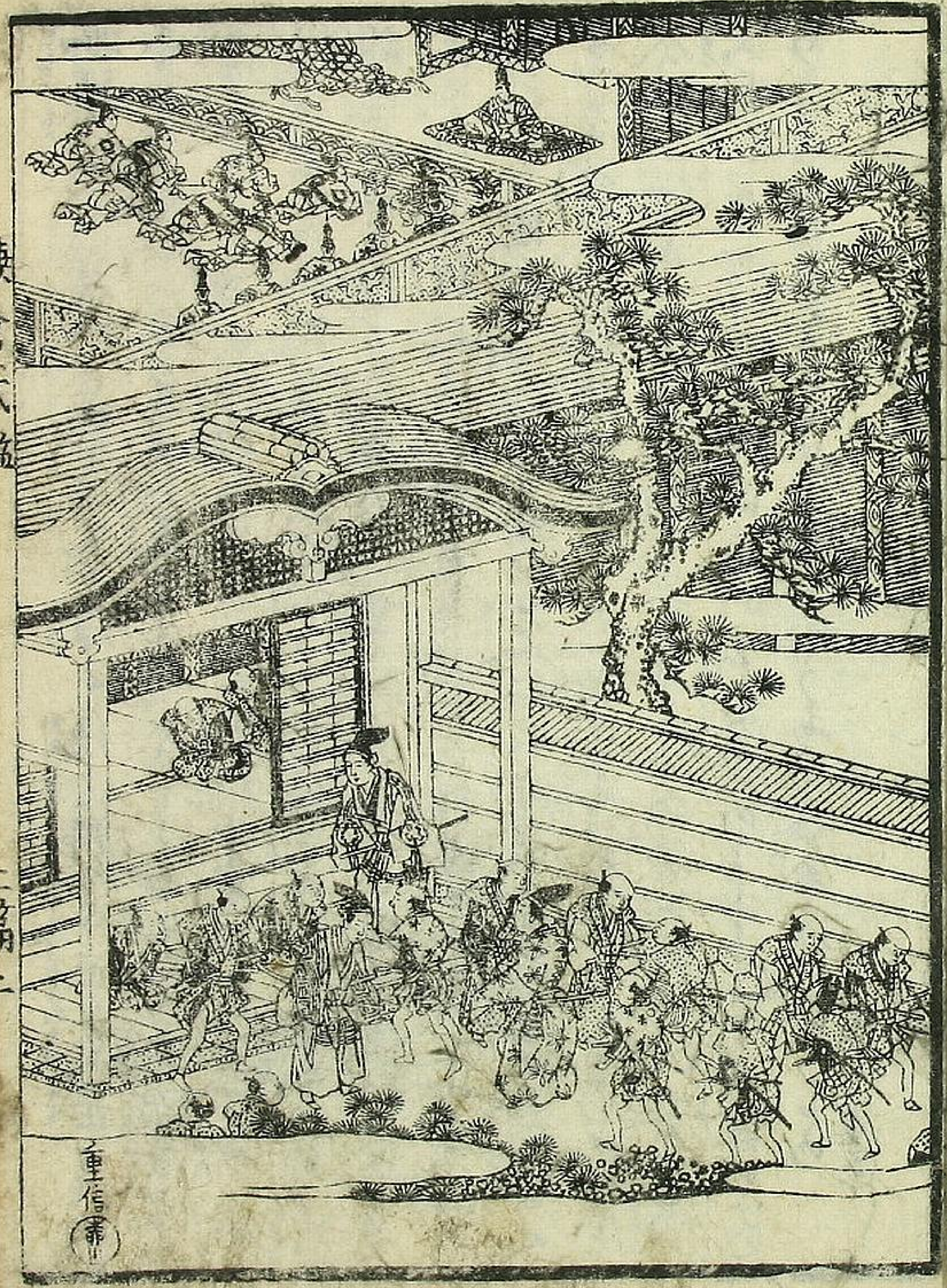
序

鎌倉武鑑刻なりて世に行はるゝおもむき
遺りたる残篇まで二篇とす意の趣く
所ハ初篇に以て今世に知れる人のいまを
もいふ篇耳なんなりとおほかれハこれを
出るにまかせあるは頭に後に序跋を
そへんとあへまつるも人とさかりはあらまし
なるべし

文政三庚辰正月　本郷梅年

つだ文庫





1827-3

抑鎌倉は染屋時忠始て是に住して後上野介平直方又居と成此
聟の八幡殿の聟となり給ひ義家に附属せらるゝに及で義朝義家より
居住ありて源氏柱礎の地となる頼朝公東国に起り一旦同
縁に在らひ御館を建らる土木功を經て經営已に成る金殿の緑
朝陽の海に臨り玉樓の甍を聳へ斜日の波に映じ参勤の徒ま
天下の豪傑政事の連綿と海内の結識を以よく世を治む
武の名く国をなすは源二位の寛仁大度武家棟梁の創業也
是より将軍の根株固くして人物名産輻湊せざるはなし
今此に源氏一統して新年を賀するの図を設け以て古代を
考へ知覧せしむるも倚これ出發見のてつぎとして三楽の一助
為さいるみなきすき侍志をかうむる泰平の祝言と
有りたし

島津

右大将頼朝卿三男
源忠久　嶋津豊後守
忠義　同三郎右兵衛尉
久経　豊後守
忠宗　修理大夫

島津豊後守忠久

日向　大隅　薩摩

忠久の母は比企の新判官能員の妹にて丹後の局と称す天の成せる姿質にして瓊枝の芙蓉の新に水を出たる如く明眸皓歯真の国色なりしかバ右幕下の恩寵かぎりなし政子の方嫉妬の心深く積されたる時攝津国の渡辺にあるに居て守護を命じて乍や傍月あり給て住吉の社に詣るに俄に産の気あり安産の祈願して其の社前にてやすらかに頼朝の落胤を産み給ふ
なれバ猶社の側にある石に縁をとりて安くと其のでしき

若君を産の上侍さまあつかする人もなくかいがいしく
一族の者どもまでことごとく心をつくし此母子ともに見まもりまします
ますますと心をよせて鎌倉へ上るべき日数経て石橋
の戦ひの時の合戦に苦しみ居ける八田武者所宗綱が下
さる程に若君ハ父君の重忠ハ頭けの上に若君十三歳の
時御前に於て元服し字忠の一字を給ひて湯津文部
大友と名乗べしと仰せありけるのち字忠の章とし
かの大隅薩摩の両国を賜ひたる其後比企能員が誅
せらるゝ時縁者なるゆゑ所領地を没収せらるしかし元
より忠勤ありけれバ再びなりける其後よく仕へける
孫連綿として栄えしは忠義の功なるべし其義の
戦ひに宇佐にて討死せし彼侍者の誕生ありし

石を浮津の誕生石と号して今に顕然たり

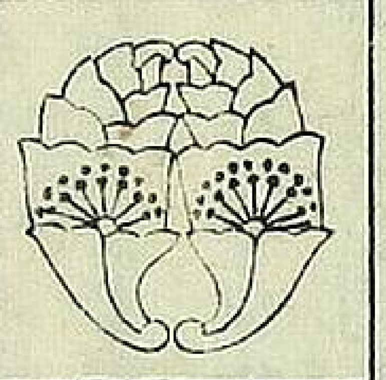
大友

閑院左大臣冬嗣公長子枇杷中納言
長良五代土佐守親實男齋院次官
親能養子實者頼朝卿長男

藤原能直　大友左近将監　豊前守

親秀　大炊助

頼泰　兵庫頭



大友左近将監能直

豊前　豊後

頼朝卿未だ伊豆の配所小御所に御座の
時籠信上野の国利根の郡司何某の
平の経家に一人の娘あり二八の春の
梅が香か桜が色よりうるはしく柳の枝に咲
せたる風情にて容色世に優れたれば
つねく経家息女を具して伊豆に下り配所の御伽にぞまゐらせ
けるを頼朝卿寵愛浅からず
世る限りなく是が御胤の腹を儲けて利根の局

とくに恩寵ありし後、姫と政子の方御の嫉妬強かりければ、[illegible]院完次度視能
に賜る程なく若君誕生ありて推名一法師と云。成長に随ひ挙止他に
超絶て頼朝公八九歳の比より出群に候ども、然る事を我が子の身に
の附右幕下心痛甚しく思はれしが、一法師十二歳の比遂に逝去ありて
中を去る大将軍の血脈として喉咽の若君にはこえ世に奉られる事なく
うしけれ、御村の老共今に武士ども忖れ、兎に角めでたき右幕下御傅
に儀あり。奥州小山判官朝政の附、大友左近将監能直と同じ戦功あり。代豊
前豊後の両国を賜しを、父の代にて西国下向ありしが、其比
豊後の元の旗頭緒方の三郎維義上野の国に配流せられ空国と
なりし故、一揆起りて騒乱せしが、能直悉く誅伐し古の掟を民を育
て能く分国を治む。又侍所の別当和田梶原不参の附、其大
能直をもつて其役を兼しめ、之に能直の七代貞載筑前

の国糟屋郡立花山に居城を築て住ければ、立花氏より出る
戸次へ能直の嫡孫親秀の弟左衛門尉重秀、戸次の庄
をありて居住せし故、戸次をもつて氏とせり。其後親秀が一
族を大友八代の武勇の誉ある九郎氏の名跡を継て親能
八代に祖より朝廷に仕へ源氏と密なり。厚く依[illegible]義[illegible]の比
より律宗に来りて宗教の事を告げ、古に軍を起す[illegible]
東[illegible]平塚の後政事を佐けて公事を行ひ人となる[illegible]
三代に仕へて勤功多し。周りに平家の臣に官六傑伏国
亭といふ者あり。実名を[illegible]みて武勇すぐれて下の氏と及び
て国人上総広常に語りける。広常誅せられて又
和能是を預る。国中庶ある者あれば伴ひに依て免あり。[illegible]
そのもとて能直に附させける

大江

平城天皇皇子一品阿保親王後胤
中納言匡房三代左兵衛督維光男

大江廣元　大膳大夫 因幡守　入道覺阿
- 廣仲　大膳亮
- 秀光　毛利左近将監

因幡 安藝

毛利大膳大夫廣元

廣元ハ祖よりして文学の家也就中曽祖父匡房卿ハ博学大才ニて和漢の宏儒ニて文章ニ妙なるよりて江帥と称さる著述の書悉く本朝の亀鑑とす源之義家朝臣ニ兵学を伝へしハ此家学廣元も亦学者ニして殊よ経済の才あり嫡子ハ掃部頭中条の廣秀ニ中条の家を継かす中条の姓となる後ニ大江姓よ改むるき家紋て勅免あり又維光ハ法度の師なるよ東國へ下りて往人中奉行先より才能あれハ政事ニ列す同姓の別當を

令せらる義綱の反逆露顕知りて申せし事ども未だ見
遂ざる代りにて文治三年紀綱の中山寺の所行守宗
の子将軍家三代の政事に預り北條家も重んじて親
密し入道して蓮生と号し嘉禄二年六月卒年八十二歳
其子季光毛利を氏とするより芸州毛利の庄の内
てより宇都宮とせり子孫安藝に住して繁栄せると唐え
の末流上田 古谷 小沢 西目 葉橋 寒川 長井 那波 海東
など称するあり

宇都宮

攝政兼家公二男 粟田関白道兼公後胤
宇都宮座主宗圓男八田権守宗綱長子

下野

宇都宮左衛門尉朝綱

藤原朝綱 宇都宮左衛門尉 武者所

朝重	弥三郎左兵衛尉	
家政	山鹿左衛門尉	
公重	三郎	
頼綱	宇都宮弥三郎	
時綱	上條美濃守	
頼業	宇都宮四郎左衛門尉	
業綱	二郎	
朝業	鹽屋四郎右兵衛尉	

往古人皇十代崇神天皇の皇子豊城命東夷征討として下向ありしが下毛野國に止りますこと三年終に逆徒悉く亡しかハ宇都宮と明神と崇め祀りけり其後子孫相續して七十代後冷泉院の御宇奥州の賊徒安倍貞任宗任叛逆の時朝敵調伏の爲に道兼公の玄孫大僧正宗圓近江の國石山寺の住職たりしを宇都宮多氣の山へ招しめしハ悪魔降伏の祈念なさしむ既にして凶徒亡び奥羽静謐によつて其勲賞として宗圓に下野國を補せしめ宇都宮の撿校日光山の

別當に兼しめらる是宇都宮の祖なり宗圓の子を下野權守宗綱といふ八田と称す其子ハ三郎朝綱 [illegible] 兼備の人なれハ家督を継て武者所に勤しが平家の一族に屬して後東國へ帰り頼朝卿に参る宇都宮社務職とも安堵なく [illegible] 伊賀の國壬生の地頭に補る其子朝業ハ [illegible] 頼綱ハ軍功あり左衛門尉に任ぜられ遂に出家して念佛の行者にて法然上人の弟子となる [illegible] 孫今の宇都宮の撿校なり [illegible] 中山大久保宇都宮より出たる國より宇都宮の祠官の [illegible] 紀清西黨とりわり紀氏ハ武内の宿禰の苗裔大納言紀古佐美より十九代紀八郎貞頼始めて常陸國信太郡を知行し仍て紀の氏の号を称す其後子孫又益々增清の黨ハ四十代

天武天皇の皇子舎人親王九代清原吉廣の子大隅掾なる
重花山院の勅勘かうむり下野國へ配流せられ芳賀郡へ
住して武士となり終ヘ宇都宮小屋まで芳賀氏とよんて
宗衛征将の時紀権守芳賀次郎朝繁なる者てさゞめて
戦功をあらはせしより右幕下の是を賞しつひへ篤絵
ある宇都宮ハ東國の名家ふして其孫葉也

八田

八田権守宗綱二男
藤原知家　八田右衛門尉　筑後守
　知重　左衛門尉　常陸介
　有知　伊志良二郎
　知基　茂木三郎
　家政　宍戸四郎左衛門尉
　知尚　浅羽六郎左衛門尉
　知氏　田中九郎左衛門尉
　時家　小田伊賀守
　義勝　中條法印
　泰知　小田奥太郎
　泰重　高田八郎左衛門尉
　知定　筑後左衛門尉
　時經　八男九郎左衛門尉

常陸
八田右衛門尉知家

知家ハ實ハ義朝の子ふして右幕下
の庶兄の續之宗綱猶子となる
てことをさるふよりて将軍家の御覺
殊ふして右筆の臣となりぬ武
勇ハえよりふして才知人ふ優れ
うち宗衛征将ふも功をあらハし
御上洛の時も御供の随一之供奉御
名誉のるありて建三ふまで右幕下
ふも寧ハたる思をよせてまとなく
御寺合ありて知家ハ先して彼是と
議ドのひしハ知家が先陣ふて後陣ハ
後と同く先陣ハ畠山守長後陣ハ
梶原景時ふ命ぜしとの事ハ知家同畠山が先陣勿論之後陣の
未ハ先例ふよりの今古老といへ大将といへ常ふさうかきて

みなもとの人氏是にあつまらんと初て即刻に下知ありて
後陣は雑乱と宮くわしる当時京都が威権強く彼に志
を通ずる者は安く背き嫉ましりのは京都に騙を引
出すされば悉く門に偏りて害を免れんとする中に知家は
は京都に従ひたる中にも甘にのごとく更に言を畢して来る事
あしき心のもとまらるべし今度も後陣をまかせ置きて
彼が隔りを挫くすべて其志気大かに後下に叙し筑後
守に任ぜらる子孫代々常陸に住して宗家氏小田と
いふ知家の娘は小山下野大掾政光に嫁さて朝綱が
乳母人なり是則ち朝政宗政朝光等の母にして才智
ある女性也其一族伊志信義本宍戸浅波中條刈田昇
筑後ありと号して宍戸門続出田昇せて

中條

知家末子中條法印義勝男
知家為養子

藤原家長 中條藤二 右馬允 左衛門尉 出羽守

家平 出羽守

時家 左衛門尉

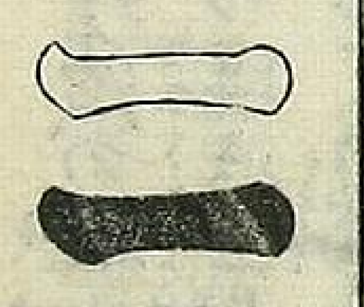
中條出羽守家長

出羽

家長は知家の末子法印義勝が子なるを
祖父知家養ひて子とし智勇ある故
右幕下の御意に叶ひ武功あまたく
なり承久の合戦中は古老の人と
同じく縁家の名を揚る子孫相続して後は評定衆
に加えられたり

山内

秀郷四代首藤左衛門尉公清四代
権守助道男刑部丞俊通長男



山内瀧口三郎經俊

伊勢

藤原俊綱 首藤滝口
経俊 滝口三郎
俊秀 四郎
通基 山内六郎

経俊の祖助道ハ義家朝臣出羽の守
の逆徒武衡家衡を征伐の時十三才
にて供に召されて戦功をあらハせしかバ
其子俊通又保元の軍に功ありて父の
俊綱ハ平治の軍に義朝に随ひ義平
十六騎の一人にて武勇又祖に劣らず此時に源三位頼政も
手勢を率して打出のひしが勅命に重んずべく一家の亡しまさ
義朝に与されバ不運の聞えいらハせんと狩猟の旅義平
ん程さ人あれども心のみ方に頼政此所へ出しまへり運を天
端よつて其てからざることそんを手に殺り頼政の縁よ
切てまつりハ乱まで戦へバ俊綱まつさきにすゝみ敵数負討捕り
頼政の内に須藤の沼の浪が末孫播磨の二郎者が射る矢ハ俊綱が
喉輪に中りてさすが郎等ハ義平これを見て俊綱が程の勇士と敵よ
首取らすまじとの給へバ斎藤実盛引返して首をかき
俊綱が首を取て味方の陣へ引帰る之二郎経俊ハ手負ひたりけれバ
経俊も無二の者とおもひけるが治承に平家の沙汰の
とき一番に馳九郎義経に組て後世を思ひされ味方に
招き動ハ将(?)経俊ハ弟俊秀と双六うちてゐたりけるが
武者所にて頼朝ハ経俊流人の身をあつて義兵をおこされ
ける時平家の勢ひに對せんとハ鶏卵を石に
投るにひとしとさまぐ悪口して頼朝ハ登(?)も山中に
照れども石の手の出ると猶おしきすりて悪口しまつり
三浦が許へそおもむきるかくて経俊ハ大庭景親が従兵よ
まくバ石橋山の合戦に佐殿に矢を射かけゝり一旦東国

平均して石橋の御敵対武衛は討死致し囚人となりし時経俊も
捕はれて土肥の実平に預けられし実平彼が父祖の忠義
をもって御赦免を願ひしと御許容ありし其経俊が母は佐殿の乳
母なれば御前へ出て泣く〳〵御座中父が討死又一ツには君の幼
きより附添へつかへ奉りし老たる姥が未来の苦痛とあはれみ
まげて経俊をゆるさんと愁訴判に及びしかば時佐殿左右に
命じて御免を仰せ出されしかば彼女性はよろこびの涙にくれ
是よりなほ御奉公に精出すべき旨申して悦び当参の隣に源を出て山門
既に二郎経俊とありければ女性も涙双眼に満て御礼申し
時佐殿此矢後の為にとその手に取らせ給ひて後に目出度しとぞ
して経俊が首級をのがれしとも又祖の忠義是は女性の歎
も不便なれば命は助けて召捕しありて追放せら

れしが後に召出され本領安堵のうへ伊勢の国の守護
となりしは是より経俊が恩に感じて粉骨を尽くし子孫
累而武蔵の国にて朝雅が為に謀叛ありて叛逆の聞えありし時討手
として五條判官有範後藤太宰少弐基清佐々木左衛門尉
盛綱同左衛門尉広綱同弥太郎判官高重等朝雅を討
討つ時経俊の息持寿丸も加はれて先に進み朝雅を討ちたり
斯しより後は六郎通基といひしは是之嫡子右衛門尉公清
が子助清まで馬首といひしより首藤といへる後藤の名跡
の名となりて代々山内と称せし佐藤首藤も皆公清を祖といふ
関より入る公清は内守輔経が後胤によりて公清が孫公清を祖とせし
右兵衛尉季清といへるより佐藤と称せし其子康清が
嫡子は右兵衛尉義清といへる是西行法師の法名円位と号し

鳥羽院の北面に候じて君寵を蒙りつれども義清常に
仏法に帰依して厭離の心少しも忘れず或とき一族なる者と共に
連て御所を出道すがら何くれとものがたり知音も家に院宣
せずやありし縮して立まれぬ次の日いまだ東の陣より出し
我の一族病りてはかなくなりしを聞ざる故に忽ち
身はかりのやどりぬと観じ出家の道おもひの年ども如意の
空のうちに何とてか生けるや義清剃髪して
うち驚きまさしくきのふ見しとすべて何事も昔人の死を
ちやなきも人とよしある竜光石火の理り今更おどろくべき
ならねどもあまりにあへなき有さまとふ無常
迅速の数も悟し志ざしの遁世の心あれど尚ゆるされまず
仏法修行の如く思ひつめしは其の日家の中を出て

かのものがたり昔今の世の中の儚さをしるし世をすて行ひかざりの
御所の名残しばし思ひけれど梅ふさがりて落る涙おしとどめて
我が家に帰り妻なる者にも年若き女を側へ生れて十才ばかりの
人世のならひに年月を積み幼のごとく我がそのかたちを見るに
て仏門へ入らんとして思ひねられども時々のあはれ
人のなかの無常の実とおもひ続けて百年のよそほひを保つべき
早く輪廻の業を去て平生の素懐を遂ん今ぞ時節到来
せりとおもひかへして歎きのいとも自ら誓ひ切れぬ
妻子をも捨て立ち去りしこそむかしの思ひの心と止める
さめざめともなく立ちさりしとよりも名利
あんの苗ざれば是より門を修し狂如火宅と観
念し一所不住の身となりひとつの菩提を求むる道に

是ぞとおもはるゝ所にて昇縁絶し山の縁なしとて圓くを拝しをを
一とせ四生の方へ志し僧徒の松山にむかう常陸新院の
白旗の御廟に詣るに荊棘道に塞く荒塊臣才同然
と應じ雉兎の住もさだかならずと西行が御陵のみかよ
跪きて此兒かつけなくも万乗の主として四果敷まし
くましまつるかうなる野辺に遷されなせ給ひ来り給ふ人もなく
配所の露と消させ給ひしも前世の宿縁にこそあらめ今
是そ御廟の御前にして八重葎たゞむれる中に坐して安き
静に持経念仏して法施をなす折しも白旗の松ふく
風音川の音のさびしさに肝心を感じ来ども忍び涙をすゝめ
かねるそゞろあはれや御廟の内よりも圓位くと召あるよ
西行声おどろき我来しうちの人のあまり神数て魂魄

まよ妄でて狐狸などの誑かすにやと心に妄想を拂ひ諸
然として眼代開きべここにこの世をさりのひし新院のありし
昔に引かへて龍顔すゝよ憔悴し御眼中光ありて朱を濺ぎ
るごとく逆鱗の有さまにて汝世に在し時を忘れず
此所に来りて訪ふる感ずるにあまりあり朕が石徳と云
すがら皆是菩提門院が讒云を本院御用ひありしよりかく
左近の鬼とする事不動を得るとても此怨を消すべき時
あらざと見よよく逆さうちに世へ又乱をおこし朕よ
つくらし者どもへことごく忍ひ知らせんと怨れる御声恐ろしう
うに「たまちどり秘の都よかよへども此は松山に音なのぞそ
なくと眺めしうのひて怡安は青よかくまて失せのよ西行ん
忍しくもあさましくも今目前の不思議に中感じて一首の歌や云

むかしの山の麻とてもかくらん後世のかたへせんとなどなりけに
此浦が中して跡よ横雲の空も遠づけハ雄人かくまて四国
の同役も秋づくし渡りまより東山へ志し鎌倉殿へ参よりし
右幕下の此家也て先祖秀郷よりの弓矢の古実武官の
ありりして此蔵に納りて子孫ヶ守るへきと
固く禅して是由と右幕下より更めて此例よおりし白旗出て
逸まる猶此かる名の頂戴して此所出後世に社ふよ
りのかかる物もちて詮ぶしと此門の初よあそび居る
寺まようちくまて為るもの方へぞゆりきる実よありぐる
条んの者たり世のよ名の事ハ多くまとども累して
ちゃ不挙をと別小侍従のかて生行時を知るべし

鎌田

首藤助道二男鎌田権守通清
嫡子
藤原政家　鎌田二郎右兵衛尉
俊長　新藤二
光政　藤太
光次　藤二
行俊　左衛門尉

一

相撲　鎌田新藤二俊長

俊長の父政家ハ源家也て随一の者な
智勇ある故よ義朝の御気入として
家の事を受継き保元平治の軍
小手柄多し義平十六騎の一人なり
平治の戦ひハ十二月の事なれハ雪よ
深く寒冷して さすがの政家も手
亀ありてる由緒義朝ハ義平は悦じて鞍の前輪よ手
形代付よとありしハ政家するうち太刀をぬいて手形をとなる
是鞍よ手形ある始也此軍破れて義朝東国へ下んとして

美濃守長基の大炊が許よ去りの後二男鈴吉ハ矢武者
あくして出ぬよて卒さと大炊が膝下小平三実とが子よて一人の者あり
此婦ハ故為義の妾よて乙若丸ニ下部ノ人の子息の母なり
此縁ゆよりて政家此実ニ任と付ま三郎野間の内海なる
長田庄司忠致ハ政家が舅よてその上源氏恩顧の者なる故
幸ありて庄司へ入べかりと家よ来て鈴吉が旨へ
のまやさと大炊もろよ家臣とも下部まよりて出し二心なく
仕へやし大炊ひそかよ家臣よりひろく今義朝合戦利
すく朝敵の落人となし平家へ保元よ以又為義君を
討る幸ひ之年政家ふしても太刀をとりて以首討る
忠道人不孝不忠の人なりとも今東国へ落んとのことも皆
人勝く落るならば運命まで八方よりて兎ても角ても

開運の期あるべからず他人に付まとうより運尽る人は我と
討すて平家の勤に預らんと悪する平治二年正月三日
風呂をまうけて入れまいらせ義朝ての巧しるれば家の子
橘樹七郎同八郎を始め究竟の者合戦を始めて是も
終よ義朝ハ鎌やかさと時に御年三十八歳也政家ハ次を
すゝめて沈酔しる平家ハ害さと告げて此ふうし平家へ拙護
此義を新しく長田の子ハ重者の勤功と以の外二條の
喜怒する不思議しるのゆゑにて生せる党論もなりける
平三実基ハ是より入道して驚る家禁とし以て右幕下
右大臣平宗のこにて政家ハ深く思ひ定まへんとて富士の根方
ゆて甲斐の源氏のうちよ付きさて忠致を保せしる政家が
嫡子保長ハ宗知より右幕下よ仕へて太炊を

因縁所の後人となりて威勢ありき手足政光次(つぐ)も
義経に属して所々の軍に武勇をあらわせり

尾藤

首藤公清四男帯刀公澄四代
玄蕃頭知忠長子

藤原知廣 尾藤五 民部丞
知宣 太郎
知景 二郎
景信 中野三郎
景綱 左近将監
知平 孫太郎

尾藤太知宣 信濃

尾藤ハ前藤後藤佐藤などゝ
同じく姫の忠尾張守に任ぜし祖を
以て尾藤と名のりて氏とせし知宣源
氏に属して軍功あり貞知京尾
藤二と称せし比企能員謀反あらわれ
誅せられて其一族出奔に及びつる時

付きの中に加わりたる者あり其子景員は義久の
合戦に功ありた近江ちぼうしょうに任ぜらる山條家時の後見と
ありて勤仕おわしきの孫まで繁昌

加藤

左大臣魚名公六代鎮守府将軍
利仁孫加賀守吉信六代加藤五
景清男

藤原景員 加藤五郎
光員 加藤太 左エ門太夫
景廉 加藤二 左エ門太夫
景友 太郎
景義 左エ門尉

加藤五郎景員 伊勢

加藤ハ其の祖吉信加賀守に任ぜらる
より加藤と称せし吉信の五代
修理少進景員ハ武勇抜群の人也
頼朝義朝に従ひて石橋山の合戦に
軍功あまたありて源家に仕へ…

尚景　伊豆守
光定　伊勢守

劣らず落し戦功をあらはし討死を
とげ守貞は京極貞頼に家貞嫡
て伊豆守となり工藤介家次が女
嫡にて光貞は高廉を生む源氏には旧恩の者なりける此光
佐渡義公の孫にて一番に子息と共に味方に加はり二男
高廉は不双の勇士にて佐渡光貞嫡男の高国の同代
山本の兼隆に仕へしけれども北条時政を見かねて
山本が館を夜討を味方勝利によるべく早く火の
手を揚げて知らせやらんとて立寄り此時高廉はいまだ
何兵の事ありて今宵の催には合ざりけれど初度の軍に
漏れんも無念の次第なりと推て御館へ参りけるに佐渡へ
小男ぐすぐすして小長刀を杖につきて遠くより山本が館を

見守りゐたりしが高廉は此時に暁きて後ろの方の勢に加はらんと先に
手附ける者どもの軍の味方を勝べき火の手を揚げて知らせんと
ひとつに得られどもさされど未だ定かならず一向に合戦難儀なれば
又んぐり汝は向ひて兼隆が前後より打入れて彼の長刀を
つかんで高廉兼隆が館を一さんに追ひすがりて程なく
敵を防ぎて軍の采配を高廉まづ手に進みて味方を励し
うんすく塀を越へり山本が館に忍びの兼隆が付きて
館に火をかけ焼たる此時加藤が名を表し又今宵の
勝利を観じて一法覚経の序品をぞ読もとしね身の安危
が事はつゝみてられしと此縁して勤陣をまつりて稲山
の戦ひのみは又三人の者武勇をあらはし軍功を立て甲州へ
落ゆき佐渡前瀬川へ出陣のとき武田と共に寺出る

道すがら駿河の目代橘遠茂と戦ひて是を討たる世の人
の武勇比類なし一統の後光員は伊勢を守護たり
景廉は弟なれども功を以て実朝公の時に評定衆に加へらる
其子景朝遠山に住して氏とす子孫鎮守府学して光員
が子光宗へなりて光兼と云よ承久の乱に京方となり
光兼を討たまて

後藤

加賀守吉信五代坂戸判官則明四代左エ門尉實遠男
後藤右兵エ尉
藤原實基

基清　左エ門尉

後藤右兵衛尉實基

伊勢

實基の祖則明は内舎人たる頼信
朝臣に従ひ軍功あり後藤内と称す
河内守に任ぜらる其子則明内舎人
となり後藤内と号す則明は河内の出
坂戸にて生まれし故坂戸判官と号す
義家朝臣に属して前九年の奥羽
合戦に比類なき手柄をあらはす
則明より後藤と称して氏とす

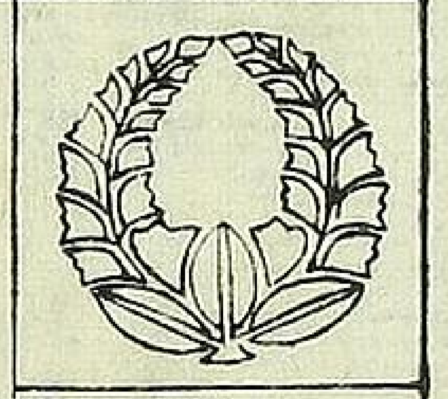
基成　左エ門尉
基綱　右兵エ尉　佐渡守
基重　右兵エ尉
基連　左兵エ尉
基政　左エ門尉　壹岐守

實基は保元平治に勲功あり十六騎の一人也義朝が
子の為ことに依て同胞の姫君を頼朝よりあづかり養育し
なりしかば頼朝感悦ありし此姫君後に一條中納言能保卿の
簾中となりたまふ實基別して右幕下の御覚よく
常に殿中にありて政事に参り中氏の讒者の讒言数多も
其子基清又子基綱となる紋家として基成まで

討死し基清ハ擒となる其三男基綱に命ぜられて
是也と兼信と其基綱ハ兄に与せず光季が手にいりて
後に法に叙せられ佐渡守となる代々評定衆に加へ
られ威勢あり

近藤

秀郷五男鎮守府将軍千常八代近藤六郎國澄男
藤原國平　近藤七



讃岐

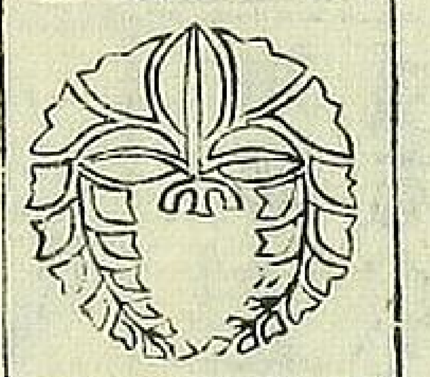
近藤七國平

國平ハ其性質直なり右幕下
彼が忠勇人にすぐれ其志氣信
義の全きを感じたまひて
秘藏の者に召されて平家
亡びて後讃岐の國の守護となりしかバ近藤と称すなり

其祖頼行鎮西探題に任ぜられしより氏となれり

武藤　小貳

千常六代島田武者所景頼二男
藤原頼平　武藤大藏丞
頼方　監物太郎
資頼　小卿　筑後守　小二郎
資能　豊前守
頼茂　左エ門尉



筑後

武藤筑後守資頼

頼平ハ武者所なりける武藏と
号して氏と成りね子孫あまた大宰
家に仕へて武勇の聞えあり資頼
平氏亡びて囚人となり三浦義澄
に預けられしが其祖の功により
古実の事を知りて平胡籙の
緒の付方などを委しく申しけれバ頼朝
きこしめして召出され

修人中せしとて依殺兄弟かうむり依の人々にゆるせ其上大勇
全き者なる故箱根やまに住せしも左寧中武州兼しめ
らしも應ねの舊領より依て中なし出しし又也武とりしめ
是よりて子孫繁栄昌して大友筆也等し而邑の勢ひを
振ふ也右しぞ代々同じうまた

水谷　田村

景頼長男
藤原能成　近藤太　左近将監
重能　吉沢三郎
仲教　田村伊賀守

常陸

田村伊賀守仲教

仲教才智ある故に絆宮荒とある五位氏なれども田村と号す仲成ぐみ重輔より出て後むしろ代々経宮荒とめる未ふもりて縁ふ庶し四天王と呼ばる中に多賀谷山川忠とは皆家代々ふし

仲能　刑部大輔
重輔　水谷淡路守

原

参議乙麻呂十一代右馬允維清
五代四郎清行男
藤原清益　原三郎
忠安　右兵衛尉

駿河

原三郎清益

清益ハ世々駿河の国原郷に住まで世して原を称す武勇の名すれあり曽我兄弟夜討のとき徳せ合せて戦ひしが兵を加うむりてひきとりぞく清行が兄弟まるみ其に原の家仲福

經次とてありけれども武勇の人なり

岡部(おかべ) 船越(ふなこし)

右馬允維清二男船越四郎大夫
維綱男権守清綱長子

藤原泰綱(やすつな) 岡部権守
　忠綱(たゞ) 小二郎権守
　時綱(とき) 右兵工尉

駿河
岡部(おかべ)権守泰綱(ごんのかみやすつな)

忠綱父子(ふし)は伊豆(いづ)のくによりかたきを
時より志(こゝろざし)を通(つう)じ富士川(ふじがは)の合戦(かつせん)
とそ(?)の戦功(せんこう)ありける
岡部が一族(ぞく)廣(ひろ)く
別(べつ)に家(いへ)をたて

橘氏中(ちう)にも奥津(おきつ)太田(おほた)野辺(のべ)蒲原(かんばら)池田(いけだ)池鯉(?)吉河(きつかは)
船越(ふなこし)等皆同流(どうりう)なり

吉河(きつかは) 吉川(きつかは)

維清三男入江権守清定三代
右馬三郎景義男

藤原經義(つねよし) 吉河三郎 入道本無
　友兼(ともかね) 小二郎左兵工尉
　經光(つねみつ) 左工門尉
　經高(たか) 右兵工尉
　經盛(もり) 二郎 左工門尉

駿河
吉河小二郎友兼(きつかはのこじらうともかね)

友兼も岡部(おかべ)の一族(ぞく)なり祖(そ)より
して駿河の住(ぢう)人を右大将家に仕
へて功あり曽我兄弟夜討(ようち)の
とき兄弟と戦ひて疵(きず)を蒙(かうむ)る
梶原(かぢはら)景時(かげとき)逆心のとき友兼の武勇
を恐(おそ)る正治二年景時父子一宮(いちのみや)
城(しろ)を遁(のが)れ出て上方へおもむくとき紀
駿河の国にて当国(たうごく)の住人飯田(いひだ)芦原(あしはら)吉河船越(?)景時
とう戦ひ中にも友兼高名(かうみやう)ありて景時が三男景茂(かげしげ)

を討しより敵陣敗走して悉く討死す是より
其功抜群なりとて播磨の国福井の庄を賜ハり
また子経光ハ承久の合戦に高名ありしゆへ安芸の
国大麻本庄二ヶ所を賜ハるによりて嫡子経家ハ安芸
の住人となり二男経政ハ播磨の国を住居と定めより其の
家二流となる吉河氏にて吉川といへる子孫連綿と
今ハ毛利に属せり

二階堂

乙麿十代駿河守維遠四代
白尾三郎太夫行遠男
藤原行政　主計允　山城守

信濃
二階堂山城守行政

行政ハ其祖伊東系図と同じ
く南家の裔なり祖より代々駿
河に住して行政の母ハ熱田の大宮司
季範の妹にて行政の母ハ頼朝の伯母
の由緒あるに依て親しく源家に
仕ふ行政を建久の末より
一統のうち問注所を預り政所
の執事を命ぜらる行政始めて白尾
三郎といふ子孫相續して代々執事
也ありつる一族多し

波多野

秀郷五代相模守公光二男佐伯
兵庫助經範四代筑後守遠義

- 行光　信濃守
- 行村　号行西　左衛門尉　大隅守
- 元行　二郎左衛門尉
- 行義　左衛門尉　出羽守
- 行久　常陸介
- 惟行　白川四郎式部大輔
- 行盛　信濃守　号行然
- 行泰　加賀守
- 行綱　伊与守
- 行忠　信濃判官　号行清

相模
波多野二郎太夫義通

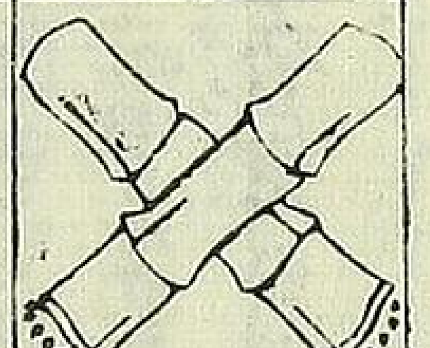
長子
藤原美通 波多野二郎太夫

美経 松田右馬允
高綱 波多野小二郎
忠綱 小太郎 中務丞
美定 三郎
美景 五郎
實方 廣沢与三

美重 出雲寺
経朝 二郎
朝定 弥二郎 右兵衛尉

義通が祖佐伯経範ハ頼義朝臣ニ従ひ奥州前九年の合戦ニ無比の武勇をあらはして終ニ討死す其子氏経并秀遠も父と共ニ此軍ニ命を捨て忠孝を戦死して後其家としておこれ波多野の庄を領せる是より氏として義通ニ武勇祖ニ減ぜず保元平治の軍ニも義朝ニ属し義朝十六騎の一人にして戦功あまたにてその家を叙せられてありて二郎太夫と称し然ニ義通の妹を坊門の姫とて義朝の妾となりて中宮進朝長を生めり

松田
美通長子右馬允美経男
藤原有常 松田二郎
政基 左衛門尉
政泰 五郎

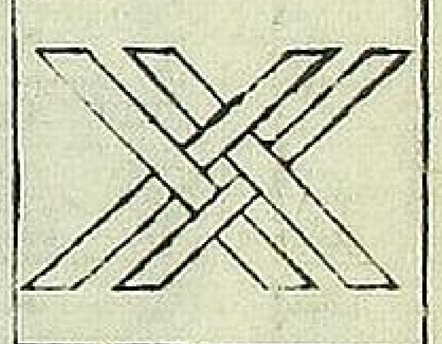


相模
松田二郎有常

有常の父義経ハ同苗松田小次郎と名のり氏とす佐伯義家の子孫義経ハよろしき西殿ニありける頃嫡子にてありながら一族を離て伊豆にある軍勢に下て後大庭平太景親ニ我孫あれバ類よ縁を継ぐも皆悉しるく衛士年を経てまで有常が出され松田の庄をうけ是より又其家を続きてしそん相続せる

波多野

藤原忠綱　淺通三男　波多野小太郎　中務丞
義重　波多野出雲守
經朝　同二郎
朝定　同弥二郎
秀頼　緣野五郎
宗重　川村又二郎
宣時　川尻左エ門尉



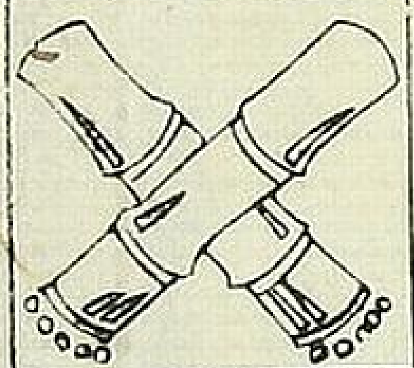
相模　波多野中務丞忠綱

忠綱ハ武勇勝れたり鎌倉の元祖ニ神保の手につき志摩の國ニ於て江の四郎と戦ひこれ其子刈三郎義定と共に秘乃江四郎がそれども二人を討とて敵兵を退け右幕下の御感ニ預る三男なれども本家を續がり和田合戦の時ハ行親方へ參り先陣すりするとて宿所ありけり無二の者ニあがりめされ千葉の義宗とて紙弥宗兵衛ニ加へらる又三男

武勇勝れ王和田合戦の時勵しくて度ハ數千騎を禦ぎ戦歿なるといへども和とも世に将軍家の御為を讓る大剛の者也經家が子孫緣野の村など称も波多野とありて嫡家と代義通が又男義景ハ波多野の庶流義通より讓らるゝ六男ハ宗家といふ廣沢与三と号をまた又勇士なり

河村

藤原秀高　筑後守遠義二男　河村山城権守
義秀　同三郎
秀清　同四郎



相模　河村四郎秀清

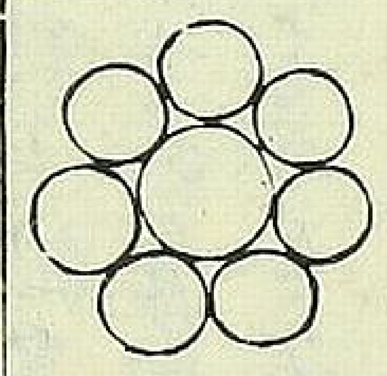
秀清権原を千騎丸といふ又秀高ハ波多野義通の弟也母ハ臨子の方の侍女年経の局といふ付縁ニより別て

就令と出給ふ奥方陣の時ハ十三才にて供に従ひ要劣
にて首服を加冠ハ小笠原清忠と號し初是といへども
度々手柄をあらハせし兒若秀と石橋山のたゝかひに敵とあり
さる故因人へまり大庭景親に頸うけられし後誅せらる
されども其子吉郎時秀を召出され御家人とさと召抱
の子孫相續せり

富樫

房前公五男左大臣魚名公六代
鎮守府將軍利仁四代加賀介
忠頼七代二郎家經男

藤原家直　富樫介



加賀

富樫介家直

家直の祖忠頼加賀介に任して
國人とよばれて其子吉宗より代々加賀に住

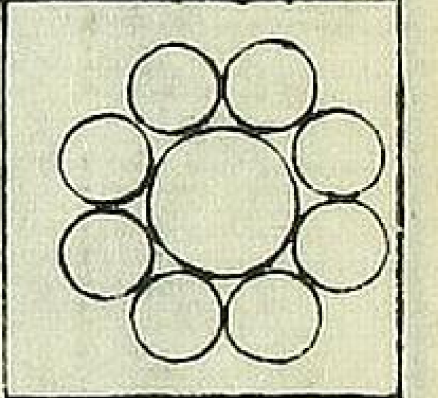
住を其子宗助に二子あり嫡子ハ貞
宗とらい林の祖也二男家國富樫

眷家　富樫介

介を称して當國の介に任ぜらる是より代々當所に住して
て代々任せし家國が四代家経ハ木曽義仲の時味方に
参り所々の戦ひに功あり其子家通ハ鎌倉殿に属して忠を
励むによりて祖のごとく加賀介に任ぜらるよりて人皆富樫
介と称せしと其子家経頼朝に属して子孫連綿たり此外にも任せし
介の世に称ハ実ね又出羽介ハ安倍姓秋田城介とらひ伊豆に
狩野介あり相模に三浦介下総に千葉介上総に上総介周防
に大内介遠江に井伊介富樫を加へて武林の八介といふ
いづれも藤原利仁の子孫より出る家々ハ此家にあ
くありつぎに出る

林

忠頼七代林六郎光明長子
藤原光平　林太郎　号今城寺
家嗣　林二郎
光時　同三郎



林二郎家嗣
加賀

林は代々加賀に住して一族の棟梁也始め本名は北国へおもむく時一族と共に味方に参り加賀越中両国の軍に功あり中にも光明は子共八人にすぐれて武勇をあらはし其子今城寺太郎光平は無双の荒馬乗殊に光平も尻に抽でゝまつさきにすゝみ篠原にて討死す家嗣は強念よく経て此世同流念光房田藤井赤塚竹田の是板津松任白江石浦宮永大桑などいふも又林の末葉也利仁の子叙用始め加賀介に任ぜしより富樫と称す叙用の子吉信の嫡子加賀介忠頼は林富樫の祖也三男越前の押領使民部少輔伊博の子帯刀の長為延は加賀の押領使となる是を林と富樫と云其弟吉宗は斉藤と号す則光と河合斉藤とは二流となり則光より四代を斉藤太郎とは号す又此国にて出生し後武蔵を去り其の斉藤の斉藤を仍て其弟の斉藤別当と称す武勇は世に許されて又末葉の子孫代々源氏に従ひて功あり平治の軍にも義朝に属し義平十六騎の一人にて大剛の者也是より斉藤義朝の子帯刀先生義賢は秩父二郎大夫重隆の川越太郎重頼が聟也是に従ひて武蔵の比企郡に住す義平は鎌倉にて悪源太とよはれ久寿二年八月十三日武蔵国比企郡大蔵合戦にて義平の

隨兵久下二郎重光が矢に中りて義賢戦死ありそのとき
義賢より当家の重宝あり駒王丸とて実盛是を預りて
いたりしに義平ばかりと母君共にかやされんといふにも隠して助け
来りしもせぞやと乳母に抱せ故郷へ披露しく
ひそかに木曾の山奥にかくまひの間は権頭中原兼遠と
て無二の友ありしが志ふかくの仕縁の譲り受て下し若
君を幼なけれと彼んで君に影を表て譲りぬ兼遠も源氏
恩切の者なれば能く介保しまたこれを後に木曾の冠者
義仲と申せしは此若君之天性智勇力備り殊によく会
学よく達し存よく源氏の衰へたるを嘆き人の知らざるは
幸ひに田舎武士の無用陥するを却てらく郎従一両人
と累しをりく都よりて平家の動静堂上の光景又

地位の険易武人気の剛臆を察し潜龍未だ時を待のうへ
竹園と同じく三條の宮の令旨を賜り多年の鬱憤を晴
一時に起しぬと商議して義兵を挙の旨に随従せる者は
兼遠をはじめ三人の子樋口二郎兼光今井四郎兼平落合
五郎兼行并に同国の住人楯根井行親源氏の末
仁科井上高梨手塚を始として味方に属し此勢をもって
同志の諸将と平家の軍に小勢をもって大敵に当り戦ふ毎に
必ず利を得たり平家是を聞て大きに驚き其故は惟盛
将軍の名代に城四郎資長を越後より呼出し
討手にさし向しが義仲奇計をもって資長が陣中にて
亂死せしむまたまた越後へ出張林富樫越前の一族
退く内絶加り今ハ勢ひ強大になりて北陸揮下に従へ

平家かさねて中納言維盛を大将として討手に向ふよし越中迄
砺波山倶梨迦羅峠にて義仲の術に破られ平家の大軍
利を失ひ敗軍して逃る平家の武者今度は越前の三位通
盛は宗徒の者あまた従へて大軍にて北国へ下向す義仲の勢は
猪俣さんにして越前加賀の両国の兵を引率して安宅に陣取
実盛ハ源氏譜代なれど平家に属し多年恩恵を受けて
このたびの合戦にも宗徒の中に加へられ軍は北国の案内
者なりとて通盛に付けて出陣ある実盛内府宗盛に申さく
まう出て一旦は出陣して一族多く又我を知るものおほしび
あつま今度下向して老後の我身を生かし得たく
んはあるべしとて君の御恩の深きを思ひて錦の直垂を
美国よそ見えんと願ふに頼みつよりて宗盛にも其志を感じ

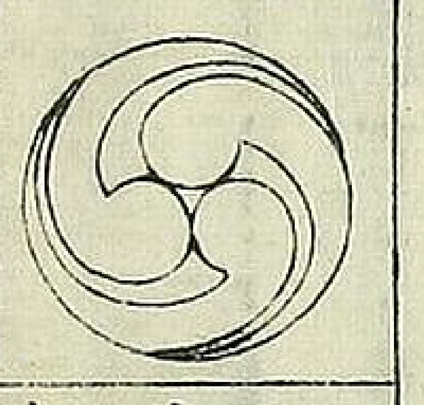
その日錦の直垂を給はる実盛ハ西国をさしおきて下向せしと
さまで不要なる度ハ実盛が助けまゐらせてまれバ一陣に進むべ
我と讒る者多かるべしと察し又一つには老武者と侮られまじと
無念の姿をかへて打出んとおもひ鬢鬚を墨にて染て黒々と若
して見えなバ是れ源氏の若武者と実盛にとりも変ひ
今までの錦の見えねと悦び篠原の軍中へ手勢を卒て
たゞひとりなる度の加勢の人々ハ多くしりぞきて猛虎の
ごとく天下に云なれバ平家の強武者ともおそれ遅れて
勢を後陣とまハりつるに実盛ハ一人重て朝しける事たのもしく只
一騎馳る勢の中より駈て多く切れども射れども物ともせず
せざて進み行る者すくなかりしが勇を振て戦ひしかど終に
信濃源氏手塚の太郎光盛として大

剛の勇士ありける馳出して是かくまで名のれよといへども續く勢
もなかりし郎等とおぼしき者主の前へすゝみてありつれ敵よ
と組んとす光盛が郎等主に押並べて馳ふさがる實盛の
とらんとす好しき者の振舞よし鞍の前輪に引付て首かき
かくせんとするに光盛は實盛が後へ廻り草摺をたゝみ上げて
三刀さし名のれ〳〵といへども實盛はつひに名のらず首を
ぬき我首は本意なるぞとて其姓名はしるべきぞとよ
討取りたる者なるゆゑ是を木曽殿の實檢に備へ
志らずの由申せしかば籠く見しり首は洗ひせよとて
まさ〳〵く流せしに元の白髪とぞなりけるあはれむざんや
是は被落實盛が首なり白髪を墨に染めて恩を
あらはし我陣中で討死をすべしとぞ古今無双の勇士なりと

昔今かくすぐれしとも是ひとりのみ樂府にぞ載のたま
ふる其亡骸は厚く葬り佛事供養よくいとなみ給ひ
しかば快くも實盛が義心を賞嘆しけるさまなれば
言行の正しきと信義の全きは世にまた有がたし實盛ごとき
成さて是人今にあり得てぞ知しかるべしとて實盛が子孫
實房といふ其子宗房尾張守大猪老丈となる

伊賀

秀郷十代刑部丞光郷男
藤原朝光　伊賀守
光季　所右エ門尉
光宗　式部太輔　左エ門尉



伊賀

伊賀右衛門尉光季

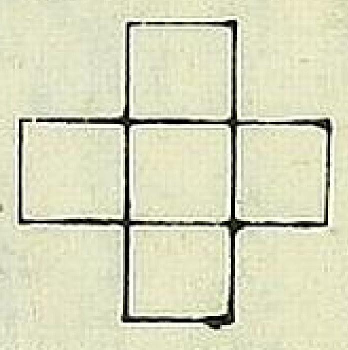
光季は文武を兼て人物豫遜也ことに北條義時の縁家なるをもつて宗哉の

宗義　太郎　左衛門尉
宗綱　二郎　左衛門尉
光綱　壽生冠者
光高　左衛門尉
光時　壹岐守
光義　隼人正
季村　四郎
實光　五郎

京所司代を命ぜられ在京せしが承久の
後鳥羽院鎌倉殿を亡さんと御企ありし
ある時召されしども志を変ぜず官
軍に討れけり嫡子光綱と孫光村とは
其後貞応二年二位の尼光季が子
共召さるる事の人を召出されけれども
十歳未満也光季が忠死をあはれまれ
あひ悪く父の遺領をのこらず光季が
守光宗は政所の執事職を命ぜらる
ながら一旦事に坐せられて叙又二階堂隠岐の入道行西に
あづけられ所領を召放され信濃の国へ配流せら
る其後恩免ありて帰住をゆるして光綱より家衰たるよ
伊賀と称せし家の紋は八葵巴を用ゆ

安達

左大臣魚名公五代中納言山蔭卿四代出羽介國重男
藤原兼廣　小野田三郎
盛長　安達藤九郎
遠兼　民部丞
遠元　足立左衛門尉
景盛　弥九郎　右衛門尉　秋田城介
時長　大曽根　右兵衛尉



参河

安達藤九郎盛長

盛長は佐殿の幼稚のときより随従して
伊豆の配所までも供奉し少の間も側を
さらず精忠他に比する人なし佐殿
源氏再興をおぼし立るの初より
盛長と謀る事職しく忠勤比類なし
佐殿の時盛長に命ぜられて石橋
山にても苦戦せし十三騎の一人也

義景 従五位上 秋田城介
泰盛 正五位下 秋田城介 陸奥守
時盛 四郎 左エ門尉
重景 九郎 左エ門尉
顕盛 加賀守
長景 美濃守
時景 左エ門尉

一統の後義景の勲功を賞し秋田城介
補ひ三河の国の守護を兼し浮宕流に
加へらるこの子に九郎泰盛ハ父が勲功
によりて従五位下に叙し出羽介に任
ぜらる泰盛或時泰盛より一人の美女
を得て寵愛なきるに継母ありまし
よろん執権時頼色好みの性質なれバ
聞しに執権泰盛に給ありしく
召されしとせられしかその
にてまづ総縫女の彼女の縁へ
つそつに縁者をおくりされど女ハ兼て
かねて兼ねるあらひあまたは彼女のうちにおもひつまりてなり
のつ所よ三河の国より勝力ありて四郎時景らの盗賊

當座へ来への盗賊をあまさふより是を捕へんとすれども盗賊
剛勇にして却て彼が為に不覚をとまり早く退去を加へ
のかぎんバ歩兵ならべし手を執家々人の是究竟の
ものぞ一にとりて二人合とするのに一策とぞ泰盛
盗賊謀計を合ぜしむる泰盛他へ遣りて固く辞をその純
給よ三河へ給が父の遺言を讒の国その道へ家来ありて
して父の給事つゐぎとしよりやめる子く給ひ出て治
ろしと愛すら泰盛へ今ら是辞するとあこらぎ経営て
ありそより執事の給の鎌倉中野の郎能に命ぜられ
風聞してよ泰盛が居宅へ忍びて彼女とうらひより
向の出所へ連来る執事と悦びのくことを傍とせしのよ
来まして娘の子におきてのよかして妾をば泰盛

賊徒を悉く討平げ其名言よして右衛よゆれバ彼女を
うたがれしとりへ小高時大ふ怒りとくざもせんかた無く
高時ふ囁きて其婦人ハ那家の法ふありと告る
高時是を聞て罪ありしむ此時又僧人ども高時の
西の御所ハ捕りて出家の頂けんとするをびく利口にありて讒
言さふよりさもあらん此ハ彼るる又ふ乃亡して其ひの
根ふさんべしと小高時景盛を討手の大将として軍兵を
あつむ二位の尼此由を聞ふひこれハいかなる僻事ぞ彼ハ
故右大将の御所ふ居してより忠ありて私ほし是を誅せんハあや
まりなりといふさて二階堂民部大輔行光を使として和議
々への教諭ありて安達ハ難なくまぬがれ宗盛ハ景盛ハ
将軍家を尻しまうるこそ嫁ハ北条時政の母の輪尼として
人の知る所の寵愛せされバ是より安達の家繁昌しく
其の猶ハ好み終よ比をも義宗が子泰盛ハ其威ふ募りて
驕奢の志しきたよりて弘安八年北条貞時が為ふ殿中
ふおいて殺されその子孫終よ衰へ

鎌倉武鑑二編上之巻畢